

# 資料涉獵余話

その120

第二回目は、翌月  
二月十九日である。  
当日の日記は、作品  
を中心にこう記され  
ている。

またうちまじりを  
畝傍山ゆはるかに  
見ゆる春日野の大  
仏殿の大き屋根か  
も

山畑ゆ、畝傍山ゆ  
の二首を佳作なりと  
言はる。

放課後、久保田先  
生を訪ひ歌評しても  
らふ。十五首のう  
ち、八首をよしと言  
はる。  
すこやかに秋蚕生  
ひ立つわが家の庭  
にカンナは咲きつ  
ぎてをり  
山畑ゆもぎ来し桑  
にはこへ草蔓草あ

（日記には八首全  
て記載されているが、  
ここでは赤鉛筆で〇  
印のある三首のみ記  
した）  
午後、原田彦治君  
と歌を持ちて島木先  
生を訪ふ。先生、神  
経痛なりとてねてゐ

三首目は奈良を旅行  
した折の作のよう  
だ。持参した十五首  
の内、半数以上が赤  
彦の眼鏡にかなった  
のだからすごいこと  
である。  
朝夕を紙漉き暮ら  
す山里のわが家の  
軒に梅の花咲く

## 師島木赤彦と弟木下右治

若き日の木下の日記から②

鎌倉 貞男

第三回目は、四月  
二十五日である。

山かげに湛ふつつ  
みの水澄みてさわ  
に芽をふくねこや  
なぎかも  
山畑の雪はまだら  
に消えにけり疲稜  
草をわれ摘みに来  
し



木下右治（昭和7年頃）

これらの歌等を、  
特に佳作なりと云は  
る。

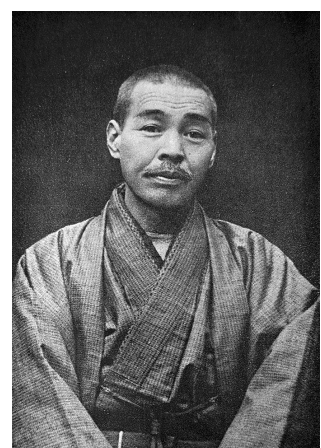
歌評終りて色々の  
話をして下さる。殊  
に目下の信濃教育界  
に於ける県当局の  
暴虐なる処置に対し  
て義憤をもらさる。  
湖の見える部屋にて  
先生の高潔卓見をき  
いて、おのづから心  
に感ずるものがあつ  
た。：  
（日記には右三首を  
含めて十一首記載さ  
れているが、ここで  
は佳作三首のみ記し  
た）歌はいずれも故  
郷下伊那の早春の景  
色を詠んでいる。赤  
彦から直接歌評を受  
けるようになってま  
だ日も浅い木下が、  
師から「歌境甚だよ  
し」と高評を得るこ

と自体希なことであ  
らう。

第四回目は、九月  
二十七日である。

空気が澄みに澄ん  
で、日中を歩いても  
空気のなただやう  
つめたさを感じる秋  
となった。原田君と  
二人で又歌をもって  
久保田先生を訪ね  
た。先生は非常に勉

強せられてゐた。十  
二日から一室へ籠つ  
たきり外へ出ないと  
言つてゐた。十日ほ  
ど湯にもはいらない  
といった。何か萬葉  
集に就いての著書を  
するのださうだ。先  
生の勉強するのはい  
つもながら実に驚か  
される。十四歌をも  
つてゐる九つ採ら  
れて、そのうち、こ  
れは大いにいいと言  
はれたのが、  
わが宿の小屋根の  
松葉掃きにけり今  
朝はろばると佐渡  
島見ゆ  
（能生海岸）



島木赤彦（大正15年）

右の歌は、この年  
の夏八月に高島小学  
校の歌友と新潟県の  
能生へ海水浴に訪れ  
た際の作と思われ  
る。なお、同年十一  
月号『アララギ』所  
載のこの歌を始め、  
左記で紹介したどの  
歌も、さらに紹介で  
きなかつた歌も、当  
時の『アララギ』各  
号に「島木赤彦選  
歌」として、本人名  
で掲載されている。